

説
図

日本の児童書四〇〇年

—— 絵本と挿絵の歴史事典 1 ——

川戸道昭 著

はじめに

以前から疑問に思っていたのだが、日本には、どうして、児童文学や児童書の歴史を一覧できる通史がないのだろうか。たとえば、近代児童文学史と銘打った書物をひもとくと、その起点は、明治初年から一〇年代あたりにおかれ、それ以前は児童文学の空白期とみなすのが一般的となっている。もう一方の近世児童書史を開くと、反対に、幕末から明治二〇年あたりが終点とされ、それ以降は完全に対象外となっているのが通例である。しかし、本当にそうなのだろうか。日本の児童書は、明治初年から一〇年代にかけて、内容が一変してしまうほどの大きな転換があったのだろうか。

そのことを確かめるために、実際の資料に当たってみると、幕末期の子どもの本と明治一〇年代あたりのそれには、ほとんどといっていいほど違いは認められない。江戸中期から後期へと脈々と続いた草双紙の流れは、明治に入っても、決して途切れることなく続いていった。ただ続いただけではなく、西洋の新染料・新挿絵技術による新たな装いのもとに、一種独特な輝きを放つ絵本として、当時の子どもたちの心を魅了していた。江戸の草双紙と明治の草双紙、その間に、新たな技術革新による造本上の変化は認められても、内容上の断絶は認められない。

同じことは、明治二〇年代以降の児童書についてもいえるだろう。たとえば、日本の絵本の先駆けとなった博文館の「お伽画帖」や金井信生堂の「教育絵本」の多くは、「桃太郎」「浦島太郎」などの昔話か、「八幡太郎」や「俵藤太」などの英雄もの、あるいは「曾我兄弟」などの仇討ちものがしめる。大正・昭和期に至ってもそれは変わらない。大衆児童文学の先駆けとなった立川文庫の内容をみても、少年少女の圧倒的な支持をえた『少年倶楽部』や『少女倶楽部』の内容をみても、相変わらず「宮本武蔵」「水戸黄門」「大久保彦左衛門」「頼光山入」「鉢かつぎ姫」といった、幕末の絵双紙と同じタイトルの書物や連載ものがならぶ。その雑誌を発行する「講談社」という名前そのものからして、すでに江戸の伝統話芸の継承を示唆するものとなっている。こうした事実を目を閉ざして、「近代」の要素のみで児童書の歴史を組み立ててきたこれまでの方法は、はたして正しい方法であったといえるのだろうか。

「近世」と「近代」の間に一線を画して、双方をあたかも異質のもののように扱ってきたのは、実際の歴史の流れにもとづくというよりは、むしろ、「近世」と「近代」に分断された学問世界に属する人たちの都合によるところが大きかったのではないか。少なくとも、実際の資料の上から児童書の歴史をふり返って見た場合、明治維新の前後を切り離して考えなければならぬ必然性はどうしてもわたしには見あたらないのである。

やはりここは、実際の資料を第一として、それをもとに、再度、児童書の歴史を組み立て直してみる必要がある。そのような考えに立って、明治維新以降の児童書の流れをふり返ってみるならば、それは、江戸以来脈々と続く物語や昔話の流れに、西洋からもたらされた物語や思想が加わって、新たな児童書の流れが形成されていく一連の過程と捉えることができるだろう。あくまでも、それは伝統的な基礎の上に築かれた新しい流れであって、西洋の物語や思想のみがその流れを形づくる唯一の要因となっていたわけではない。「近世」と「近代」を切り離すのではなくて、双方連続した流れと捉え、その上で、維新以降流入してくる西洋の書物の影響を受け、日本の児童書の流れが大きく変わっていく状況を確認していく、そこそが「近代」の児童書・児童文学の歴史をふり返る正当な方法ということになるのではないだろうか。

そのためには、まず、原点にさかのぼって江戸の児童書の流れを確認するという作業がどうしても欠かせないものとなる。それによつてはじめて、江戸以来脈々と続く物語や昔話に、西洋からもたらされた物語や思想が加わって、新たな児童文学・児童書の流れが形成されていく一連の経過が見えてくる。そして、そこそが、真の意味での日本児童文学史・日本児童書史ということになる。そのような考えに立って、「近世」から「近代」へと継承され、発展をとげていった日本の児童書の流れを再度捉え直してみようというのが本書の大きな目的である。

本書執筆の直接の動機はそういうことにあるが、それとは別に、もう一つ、わたしがこれを書こうと思った理由がある。それは、児童書における表紙や装幀や挿絵に関わる問題である。普通、児童書を手にした場合、わたしたちは、まず、造本の妙や表紙の美しさ、挿絵の面白さといった、視覚面における創意や工夫に目を向ける。そこに興味を惹かれるからこそ、多くの人は、書店の児童書コーナーや、挿絵の展覧会などに足繁く通う。大人でさえそうなのだから、子どもたちはなおさらのことだろう。不思議の国のアリスではないけれど、「絵も会話もない本なんて一体なんの役にたつのでしょ

という気持ちになるのは当然である。それが、ある一定年齢までの子どもたちの書物に対する偽らざる感想ではないだろうか。要するに、児童書は、その装幀・挿絵を切り離しては、完全な児童書とはいえないということになる。

そうである以上、児童書史も、装幀や造本、表紙絵・挿絵をも含めた書物全体の歴史を扱って、はじめて完全な児童書史となる。ところが、どういうわけか、そうした視覚面、造形面を含めた、総合的な書物としての歴史をふりかえった児童書史というものが案外少ないのである。管見するかぎり、瀬田貞二氏が一九八二年に発表した『落穂ひろい』（福音館書店）ぐらいではないだろうか。あるいは、「近世」「近代」の枠内に限定したものをも含めるならば、中野三敏氏らの『近世子どもの絵本集』（岩波書店）や、上笙一郎氏の『日本の童画家たち』（くもん選書）、さらには、鳥越信氏の『小さな絵本美術館』（ミネルヴァ書房）などもあげなければならない。確かに、近年そうした、書物の挿絵や装幀面に関心を向けた著作が散見されるようになったが、それでも、決して十分とはいえないと思う。なにしろ、日本には、四〇〇年にもおよぶ膨大な児童書の蓄積があるのである。その変遷をたどるのに、一書や二書をもって十分ということには決してならない。

この方面ではかなり日本の先を行くイギリス児童文学界などの動向を見ても、絵入り刊本の歴史は、人々の最も関心の高い分野の一つとなっていて、それをふり返る歴史書が数多く出版されている。日本の場合は、歴史そのものは決して見劣りしないのだが、それを通覧できる書物があまりにも少ない。それが四〇〇年の伝統を誇る日本の児童書史を取り巻く現状かと思うと、いかにもさびしいという感じがいなめない。そんな気持ちから、あえてわたしも、瀬田氏や中野氏、上氏、鳥越氏ら優れた先人たちのあとを追うことにした。それがこの本を書こうと思いついた第二の理由である。

もちろん至らなさは十分承知の上ということになる。筆者は、元来、日欧の比較文学・比較文化を専門に研究するもので、とくに児童文学・児童書に造詣が深いというわけではない。ただ、日本における西洋文学の受容に関する資料を二十数年間にわたって調査・収集してきた関係から、児童書に関する資料も数千点といった数のものを目にしてきた。なかには、これまでほとんど取り上げられなかった貴重な資料も数多く含まれていて、今回のこの本を執筆するに当たっては、それらの資料をできるだけかぎり取り入れながら、児童書の歴史を組み立ててみることにした。つまり、本書は、これまで児童書史に取りあげられたことのない数多くのオリジナル資料をもとに児童書の通史を編もうとしたものであり、その

点が、唯一、取り柄といえは取り柄ということになるかもしれない。

ともあれ、この本は、筆者が長年にわたり調査・収集してきた資料をもとに、それを優れた先人たちの著作と照合しながら分類整理し、新たな児童書の歴史的流れを再構築しようとしたものである。その際に、各項の項目立てを行って、索引による内容の確認ができるように工夫をほどこした。本書の副題を「絵本・挿絵大事典」としたのはそのためである。

「事典」と銘打つ以上、できうるかぎり歴史上の重要事項を取り込むことに努めたつもりではあるが、何分、問題が多岐にわたるだけに、欠落した事柄も少なくないものと思われる。錯誤や思い違いも多々含まれているにちがいない。大方のご叱正を賜りながら、今後、さらなる内容の充実に努めていくことができれば幸いと考えている。



目次

はじめに..... 3

第一部 江戸期

序章 絵入り版本の黎明..... 16

仮名草子..... 18

本邦初の絵入り『イソップ寓話』（『伊曾保物語』）／御伽草子の版本化（『あ
たごこ』／丹緑本『うをのうた合』『けだ物のうた合』）

第一章 児童書のはじまり（一七、一八世紀）..... 24

一、江戸の子ども絵本（草双紙）..... 24

（一） 金平本..... 26

赤本や黒本に影響／坂田金時の子・金平（『仙人龍王威勢諍』）

（二） 赤本..... 28

（1） 赤小本..... 30

最初の赤小本（『初春のいわひ』）／ミイラ取りがミイラになる国（『日下開山
名人そろへ』）

（2） 赤本（中本）..... 34

草双紙の書式を決定する／蟹が頭にのったさわがにはさみのすけ（『さるかに
合戦』）／桃太郎の物語は回春譚としてはじまった（『むかしくくの桃太郎』）
／狐が化けるぶんぶく茶釜（『ぶんぶくちやがま』）／江戸のナンセンス絵本
（『くま一疋とらうな』）／子どもを強く意識した絵本（『たゞ取る山のほとと
ぎす』）／人形浄瑠璃の影響（『ねこ鼠大友のまどり』）／赤本の作者／奥村政
信の描く『頼光山入』



第二章 江戸後期の児童書（一八〇〇年～一八六八年）

- (三) 黒本・青本……………48
 - 赤本から黒本へ／黒本の作者／なぞなぞの絵本『新版 なぞつくし』／子ども向け絵本から大衆向け絵本へ『新／板丹波爺打栗』／青本は青くない？『新板 風流鱗魚退治』
- (四) 黄表紙……………56
 - 洒落と風刺を旨とする大人向け絵本／式亭三馬流草双紙年代記『又焼直鉢冠 姫 稗史億説年代記』／『猿蟹遠昔噺』
- 二、上方の子ども絵本……………62
 - (一) 半紙本……………64
 - 上方絵本はこんな本『仙童金時伝』／金太郎はだれの子か……………62
 - (二) 豆本……………68
 - 脈々と続く豆本の流れ／外題と内容が一致しない本『三軍鯨の秋』／『平家女護嶋』—近松ものの豆本(1)／享保期の芝居絵尽しとの共通点／『曾根崎心中』—近松ものの豆本(2)／化け物尽し／子どもの遊びを描いた本／西川祐信風子ども絵本／廃れた儀式—ふいこ祭りと髪置きの祝い／子ども絵本は一冊本とはかぎらない『頼朝軍記』／浄瑠璃「絵本太功記」の影響『智勇太功記』
- (まとめ) 一七、一八世紀の子ども絵本……………90
 - 特集 武者絵本の流行……………92
 - 『絵本大和童』—西川祐信の武者絵本／『絵本威武貴山』—勝川春章の武者絵本／英雄・豪傑のパターン化—二〇〇年の永きにわたって絵本の世界を支配
 - 特集 「往来物」とよばれる江戸の教科書……………100
 - 江戸の往来物—子ども絵本との共通性／楠正成の往来物／弁慶・義経の往来物／絵入り弁慶状／『頼光山入往来』—十返舎一九の伝記往来(1)／『弓勢為朝往来』—十返舎一九の伝記往来(2)／十返舎一九が手がけた往来物—十数編の目録一覧／『実語教』と英雄物語—その組み合わせにみる江戸の教育観



合巻

一、豆本

江戸の豆本／文化期以降の豆本／シリーズものの刊行―『桃太郎』と『大江山』／多彩な内容／豆本の画家と作者／『しつぺい太郎』―各地に伝わる民話の絵本

二、中本

オールカラーの『鼠の嫁入り』／嫁入りのない嫁入り絵本／『頼光山入』―江戸の一番人気の絵本／西馬作・国芳画『金時一代記』／武者絵本の流行／仮名垣魯文の昔話―『かちく山』と『桃太郎』

三、西洋文学移入の先蹤

維新以前の翻訳書／外国教科書の輸入のはじまり／日本人の手になるマザーグースの翻刻第一号

四、錦絵・おもちゃ絵・絵双六

錦絵（舌切雀）／絵双六（桃太郎）／一枚絵（鼠の嫁入り）／一枚絵（かちく山）／一枚絵（猿蟹合戦）

第二部 明治期

第一章 「近世」から「近代」へ（一八六八年～一八八五年）

維新後の10年間

序、一般書の流れ

西洋の文字を冠した書物の流行

一、西洋に学ぶ

近代児童文学史の起点／はじまりは英語リーダーから―幕末維新期の西洋童話の受容／ウイルソン・リーダー／サージェント・リーダー―マザーグースの本邦初訳／サージェントリーダーと慶應義塾―グリム、アンデルセン童話の本邦初訳／チェインバーズ・リーダーと東京英語学校―「シンデレラ」「赤ずきん」との出会い／福澤諭吉『童蒙をしへ草』―西洋物語受容の原点／『西洋教乃杖』／『珊瑚乃虫』とユニオン・リーダー／渡部温『通俗伊蘇普物語』／『通俗伊蘇普物語』の錦絵

120 116

133

144

148

156

158

159



二、新技術の導入

石版画／銅版画／赤の衝撃―西洋染料の輸入

コラム 河鍋暁斎とテニエル

明治10年代

序、一般書の流れ

翻訳小説の流行／明治10年代の翻訳小説／文明憧憬―翻訳小説を生んだもう一つの要因／未知なるものへの好奇心／パーレーの『万国史』―その気球に代表される時代の機運／亜流作品

一、英語教科書を通じた外国児童文学の受容

ウイルソン・リーダーの翻刻はじまる／「直訳」という名前の翻訳書―「キラキラ星」翻訳の第一号

二、児童雑誌の芽生え

『穎才新誌』―紅葉や美妙らの文章力を育成／キリスト教系児童雑誌―『よるこぼしきおとづれ』と『喜の音』

三、江戸の伝統、明治の輝き

『舌切すずめ』の豆本五種／豆本／『絵本あつめ艸』／中本／入り交じる装幀／銅版絵本の流行／ちりめん本／おもちゃ絵・錦絵／写し絵

第二章 近代児童文学への道（一八八五年～一九二二年）

明治18年～30年

序、一般書の流れ

新たな文学・文章への模索／翻訳に託されるべき使命―坪内逍遙の呼びかけ／西洋文学の植民地―正宗白鳥の証言／口絵入り美本の流行／明治20年代の翻訳書

一、子どもの読み物欄の出現

『ROMAJI ZASSHI』―「じふものため」欄／『WAMPAKU MONOGATARI』―本邦初の翻訳絵本／『女学雑誌』の「子供のはなし」欄／「子供のはなし」欄開設の趣意

178

175

184

194

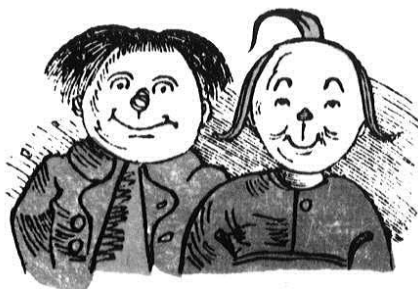
196

198

216

218

226



二、英語教科書の影響……………	230
外国児童文学の紹介は英語教科書の翻訳からはじまった／直訳本と近代児童文学／直訳本と「言文一致」体……………	
三、さまざまな試み……………	234
『日本昔話』から『西洋昔話』へー長谷川武次郎の挑戦／慶應義塾出身者による外国児童文学の紹介ー「シンデレラ」、「アリババと四〇人の盗賊」ほか／本邦初のグリム童話の単行書／ペロー童話の本邦初訳ー井上寛一訳『西洋仙郷奇談』／啓蒙家が果たした役割……………	
四、近代化への歩み……………	242
若松賤子と「小公子」／「小公子」の意義ー原文に忠実な口語訳／「小公子」の影響……………	
五、創作物語の萌芽……………	246
加島斐彦編『異国回嶋奇談』／三輪弘忠『少年之玉』／矢野龍溪『浮城物語』／石井研堂『鯨幾太郎』……………	
六、児童文学者巖谷小波の誕生……………	250
「鬼車」ー小波の出版／『こがね丸』ー児童文学の独立／「少年文学」に対する読者の反響ー楠山正雄の証言／尾崎紅葉の児童文学翻案三種／巖谷小波「日本昔噺」／「日本昔噺」の英訳版……………	
七、児童雑誌の流行……………	260
児童雑誌の文芸コーナーー外国作品の受け入れ窓口／製版技術の発達／明治20年代の児童雑誌／『少年世界』創刊／森田思軒と「十五少年」／『少年世界』とグリム、アンデルセン童話……………	
コラム 馬に乗ったはだかの王様……………	213
コラム グリム童話の発見……………	218
コラム 日本で最初にペロー童話を描いた人物……………	231
明治30年代〜40年代……………	
序、一般書の流れ……………	270
木版画入り洋装本／函入り本の出現……………	



一、外国作品の受け入れ……………	274
『少年世界』の連載小説／『少年世界』に掲載された外国著名作品／ホームズ登場／『黒馬物語』と「動物虐待防止会」／『不思議の国のアリス』紹介の第一号／『若草物語』の本邦初訳／明治30年代・40年代の翻訳書	
二、お伽噺の流行……………	288
樋口勘次郎編「修身童話」／巖谷小波「世界お伽噺」／「金港堂お伽噺」／坪内逍遙校閲「少年世界文学」／春陽堂「家庭お伽話」／小波「世界お伽文庫」／小波「世界お伽噺」の海賊版／「お伽噺」の呼称／吉岡・高野編『世界お伽艸子』	
三、教育界の動向……………	304
坪内逍遙の『国語読本』―国定教科書に多大な影響／英語雑誌に掲載された外国児童文学	
四、多様化する児童雑誌……………	312
明治30年代、40年代の児童雑誌／少女雑誌の独立／絵雑誌のはじまり	
五、絵本の流行……………	316
ポンチ絵本／富山房「家庭のたのしみ」／絵本の与える多大な影響―金子光晴の場合／富山房「日露戦争ぼんち」／絵本の流行に与えた日露戦争の影響／戦争絵本から一般絵本へ―木村省三と富里長松の貢献／博文館「お伽画帖」／金井信生堂「教育絵本」／アンデルセンの翻案絵本／『兄妹ノ探検』／富里昇進堂「小供教育絵本」／仕掛け絵本	
六、大衆化の流れの中で……………	338
押川春浪の伝奇小説／講談本／立川文庫	
コラム 創作の空白を埋めた外国児童文学……………	279
コラム 「世界お伽噺」の仮名遣い……………	293
コラム 鱒崎英朋の描いた西洋の美人画……………	297
コラム 「お伽噺」書流行の背景……………	303
コラム 英語教育と外国児童文学……………	307
コラム 外国児童文学、人気作品ベスト20……………	311

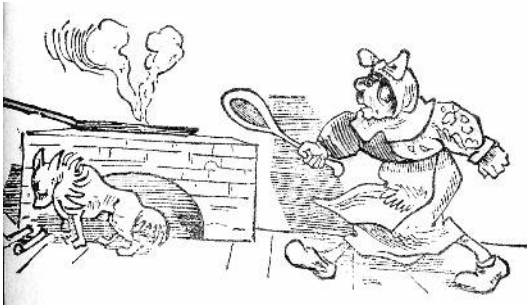


第三部 大正・昭和（戦前）期

第一章 芸術志向の高まり（一九二二年～一九二五年）

大正期

- 一、明治の継承……………348
 - お伽噺集の流行続く／豆本お伽噺集……………348
- 二、富山房「模範家庭文庫」……………352
 - 理想的な家庭読み物を求めて／『グリムお伽噺』／『アンデルセン御伽噺』／『世界童話宝玉集』／『世界童謡集』／『ガリバア旅行記』／『ロビンソン漂流記』／『西遊記』／『朝鮮童話集』……………352
- 三、鈴木三重吉の児童文学運動……………362
 - 「子供のための真の芸術家」運動―『世界童話集』／『赤い鳥』の創刊／三重吉『不思議の国のアリス』の翻案／北原白秋とマザーグース……………362
- 四、大正期の児童雑誌……………369
 - 『赤い鳥』の後続誌―『金の船』『金の星』／『童話』と金子みすず／『少女倶楽部』『少女画報』他……………369
- 五、さまざまな児童書集の企て……………377
 - 「世界少年文学名作集」（家庭読物刊行会）―海外児童文学選集のはじまり／『児童図書館叢書』（イデア書院）―小原園芳の児童書刊行の原点／『世界少年少女名著大系』（金の星社）―斎藤佐次郎の挑戦／ローマ字少年叢書「日の丸文庫」／『画とお話の本』（富山房）―楠山正雄編集の芸術的子ども絵本／『世界童話大系』（世界童話大系刊行会）／『世界童話大系』の執筆陣／『世界童話大系』の問題点……………377
- 六、大正期の翻訳書……………393
 - 明治の影響／内容の充実／美しい装幀……………393
- 七、大正期の絵本……………398
 - 中西屋「日本一ノ画噺」／小波著、龍子・夢二画『お伽草紙』／『お伽正チャンの冒険』／ポップ・アップ絵本／幼児オペラ『すゞめのお宿』ほか……………398



コラム 赤い鳥運動の功罪……………368

コラム 大正期の芸術的出版物を彩った人々……………374

コラム 翻訳から創作へ―浜田広介の場合……………376

コラム 宮沢賢治の童話世界……………397

第二章 大衆化の流れの中で（一九二六年～一九四五年）……………404

昭和期（戦前）……………406

一、円本全集ブームと児童文学……………406

二つのライバル児童書全集―「日本児童文庫」と「小学生全集」／「日本児童文庫」（アルス）／「日本児童文庫」の装幀と挿絵／「小学生全集」（興文社・文芸春秋社）／「小学生全集」収録作品／芥川龍之介・菊池寛の共訳二編―『アリス』と『ピーターパン』／平凡社「世界家庭文学全集」／「世界家庭文学全集」の特色／春陽堂「少年文庫」―児童文学の文庫本／「少年文庫」の作品構成／「少年文庫」の目録／「少年少女世界名作物語」（金の星社）／「少年少女世界名作物語」の特色……………406

二、拡大する領域……………420

カタカナ・ひらがな童話／昆虫記・動物文学の流行／児童用ディッケンズ全集／スウェンソンとアイスランド児童文学……………420

三、児童書に与えた映画の影響……………424

映画と児童書／映画の写真を載せた児童書の出版／少女雑誌の付録にみる映画の影響……………424

四、本格的絵本のはじまり……………428

「講談社の絵本」／昭和（戦前）の絵本／外国名作絵本の紹介―ハインリッヒ・ホフマン著『ボウボウ・アタマ』／外国名作絵本の紹介―ロバート・ロウソン画『花と牛』／シンデレラの絵本／創作絵本……………428

五、昭和前期の児童雑誌……………436

絵雑誌の流行／『少年倶楽部』と『幼年倶楽部』……………436



六、昭和前期の翻訳書……………442

昭和期（戦前）の翻訳書

コラム 翻訳家村岡花子誕生悲話……………414

コラム 画壇の大物が描いた世界の児童文学……………440

第四部 昭和（戦後）期

近代から現代へ（一九四五年～一九五五年）……………446

昭和20年代

継承と発展／昭和20年代のグリム童話／昭和20年代のアンデルセン童話／講談社『世界名作全集』／講談社『世界名作童話集』／岩波少年文庫

索引

人名索引……………458

キーワード索引……………466

【掲載資料は、とくに記載のないものは鴻巣文庫の資料を利用した。】